

## 教員志望学生の指導のあり方 (3)

### —教職相談室の利用の実態から—

小川 潔<sup>※1</sup> 松原 泰通<sup>※2</sup>

平成 15 年度に開設された教職相談室は、平成 20 年度から 2 名の教員が配置され、教職志望の学生の指導に当たっている。論文添削、集団討論、面接指導、模擬授業など、教員採用試験に関する指導を中心に様々な相談活動を行っている。昨年度までは 1 室で指導を行っていたが、今年度から 2 部屋で指導を行えるようになった。また、今年度は、集団討論の指導の際、ビデオ機器を使用して指導を行った。これにより、学生自らが自分の姿を客観的に見ることができ、自分の長所や短所を的確に捉えてより望ましい姿に向けて改善することができた。本年度、教員採用試験に最終合格した学生とそれ以外の学生では、教職相談室の利用回数に大きな差が見られた。教員採用試験に最終合格した学生の教職相談室の平均利用回数は 16.56 回であったのに対して、1 次試験のみ合格の学生の平均利用回数は 9.36 回であり、合格しなかった学生の平均利用回数は 4.03 回であった。

キーワード：教員志望学生、教職相談室、利用回数、指導効果

※ 1 小川 潔（岡山大学教師教育開発センター）

※ 2 松原泰通（岡山大学教師教育開発センター）

#### I 教職相談室と教員採用率の概況

本学では、教職志望学生の支援を目的として、平成 15 年度から教職相談室が設置された。相談員として退職校長が特任教授として常駐しており、教員採用試験情報の提供、学生への個別相談、集団面接指導、書類の書き方等様々な相談活動を行っている。

平成 20 年度からは 2 名の教員が配置され、相談件数も倍増した。平成 20 年度以降も年々利用者が増加している。今年度の 4 月 1 日から 11 月 30 日までの利用者は 3712 人であり、4 月から 11 月までの全ての月において前年度の利用者数を上回っている。特に、4 月と 5 月の利用者が大幅に増えている。これは年度初めの学生向けオリエンテーションで学生への

周知を徹底させたこと、他の教員から学生に教職相談室を利用するように勧めてくださったこと、そして、学生の口コミで学生間における教職相談室の認知度が高まったためであると考えられる。教職相談室の利用者の推移を示したものが表 1 及び図 1 である。表中の（ ）内の数字は新規利用者を示している。このような教職相談室における学生支援活動を中心とした教職支援体制の充実もあり、近年の教員採用率は向上してきた。（図 2）

表 1 教職相談室利用者数

	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月	合計
17 年度	104 (47)	184 (21)	168 (13)	195 (18)	267 (2)	29 (3)	81 (9)	46 (6)	33 (12)	17 (5)	31 (8)	23 (2)	1178 (146)
18 年度	134 (78)	213 (23)	193 (19)	205 (13)	174 (2)	24 (0)	87 (6)	37 (9)	25 (8)	37 (7)	42 (8)	49 (11)	1220 (184)
19 年度	196 (61)	230 (12)	222 (24)	222 (19)	278 (6)	21 (2)	61 (2)	30 (10)	23 (13)	31 (22)	27 (2)	36 (9)	1377 (182)
20 年度	209 (96)	539 (137)	387 (17)	539 (21)	430 (7)	37 (3)	148 (19)	88 (12)	104 (43)	90 (28)	86 (13)	113 (12)	2770 (408)
21 年度	305 (149)	479 (94)	496 (30)	623 (25)	421 (13)	66 (4)	176 (22)	106 (26)	99 (26)	154 (33)	152 (17)	126 (9)	3203 (448)
22 年度	731 (238)	710 (52)	556 (18)	711 (14)	501 (15)	87 (4)	261 (12)	155 (17)					3712 (370)

□17年度 □18年度 □19年度 ■20年度 ■21年度 ■22年度

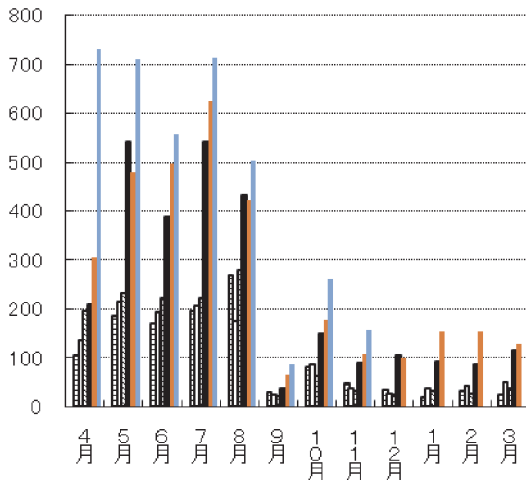


図 1 教職相談室利用者総数(過年度比較)

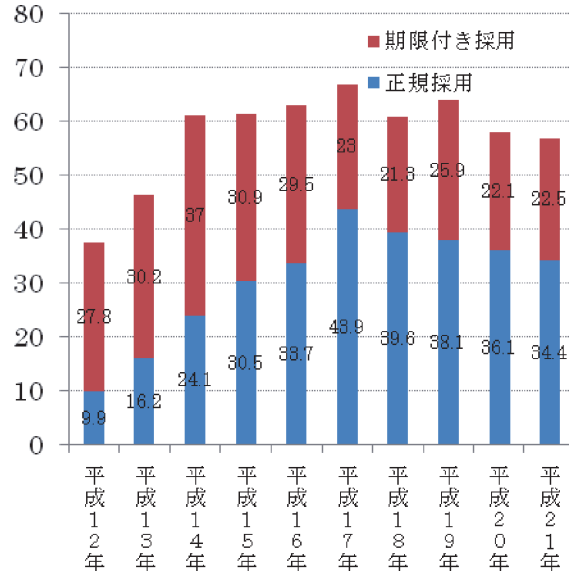


図 2 教員就職率の年次推移

## Ⅱ 本年度の取り組み

### 1 改善点

昨年度までの集団討論の指導は、討論の後、教員が良かったところや改善した方よいところなどを話したり、他の学生の集団討論の様子を見学して自分が討論する参考にしたりしていた。今年度から、学生の希望を聞き、学生が希望すれば集団討論の様子をビデオに撮って後でそれを見せるようにした。これにより、学生は、自分の入室する姿・礼の仕方・着席する姿・他の人の話を聞く姿・自分が話す姿や声などを客観的に捉えることができるようになった。そして、自分の長所や短所をはっきり自覚することができ、自分の克服すべき課題を明確に認識することができるようになった。このように、ビデオ機器を使用して指導することにより、集団討論や面接の指導を効果的に進めることができた。以下は、学生の感想である。

集団討論や集団面接で自分の姿を客観的に見ることができ、声の大きさや話しているときの仕草、表情など、改善点に自分で気づけたところが良かったです。面接官になったつもりで自分を見ると、「今の自分では採用しようとは思えない」など、厳しい目で自分を評価できました。自分が「失敗した」と思う姿を振り返るのは嫌なことです、ビデオでもう一度見ることによって、多くの気づきと学びがありました。

集団討論や面接練習でビデオを使うのはとても有効だと思いました。今までも他のグループの練習を見て勉強になりましたが、その学んだことを自分が生かしているかどうかは自分では分かりませんでした。しかし、ビデオで実際に自分の姿を見ることによって、声の大きさや表情、自分の癖などに自分で気づくことができたのでとても良かったです。また、討論の流れなども、実際にやっているときには気づかないことも見えてきました。

### 2 主な指導事項及び取り組み

本年度の教職相談室における主な指導事項及び取り組みのポイントは次の通りである。

#### (1) 作文添削

論作文には、学生一人一人の教育的素養がにじみ出てくるものである。試験官は、この論作文によって受験生の人柄、人間性、情熱、協調性などを推量していく。そして、教師としてやっていけるか、その誠実さや人間関係力をなどを感じとる。それだけに、受験生がその持ち味を限られた時間の中で表現できるように指導することが重要となる。その意味で、受験生自身が元気で意欲がわき出てくるように配慮し、賞賛できる点をチェックしていくように心掛けた。

指導のポイントとしては、

- ①出題者の意図をつかむこと
- ②全体の構成を考えて書くこと
- ③簡潔な表現で読みやすくすること
- ④意欲を書き表すこと

について、学生の記述してきた論作文をもとに指導を繰り返した。

また、教員採用に関わる全ての指導の最初に論作文から始めたが、これは後述の集団討論などにも論作文で培った自分の考えをまとめる力が生きて働くと考えてのことである。

## (2) 集団討論

集団討論では、試験官は、受験生の発言態度や話し合いに参加する態度、リーダーシップの取り具合、話し合いの雰囲気や場面理解の様子などから、教育的情熱や協調性、一人一人の人間性や迫力などを推量する。そして、学校という組織体の中で、その一員としてやっていけるかどうかを見極める。その意味で、学生一人一人が意欲的に、しかも、状況に応じた自己表現ができるように導くことが重要であると考えて指導した。指導のポイントとしては、

- ①最初の3分間で自分の考えをまとめること
- ②明るく誠実に考えを述べること
- ③他の発言者の意見に耳を傾けること
- ④試験官を意識しつつも、集団での話し合いの流れをくみとること

などについて、繰り返し指導した。

また、入退場の動き、礼の仕方など、気持ちのよい動きになるように練習させた。これは、その他の面接試験のときにも生きてくることである。

## (3) 個人面接

個人面接では、試験官は、一人一人の受験生の人柄について率直に尋ねることにより、その応答の態度や内容について吟味し、可否の判定の根拠資料とする。それだけに、かなりの緊張感をもって練習に臨んできた。また、学生にも、各県・市の過去問について調査させ、各自その答弁内容をまとめ、練習しておくようにさせた。相談室では、本番並みの心構えで、明るく誠実に話すように指導した。

指導のポイントとしては、

- ①なぜこの県・市を受験したかを試験官に共感してもらえるように、各県・市のホームページなどで、教育目標・求める子ども像・まちづくりの重点などについてまとめておくこと
- ②①との関連の中で、各自のふるさとの思い出など

を整理しておくこと

- ③何を尋ねられても、正直に誠意を持って対応すること

- ④趣味、特技を伸ばしたり、アルバイトやボランティア体験、部活動など積極的に取り組み、コミュニケーション能力を高め、人間関係づくりができるように各自の人間性を磨くこと

などについて指導した。

## (4) 模擬授業

教育実習の体験しかないのが大半の学生である。中には、一度も授業の経験のない学生もいた。そのような学生には学校支援ボランティアにすぐに行くよう指導した。学生は自分が就こうとしている仕事について、大まかに理解することができ安心していた。

昔と違い、現在は、新採用教員に即戦力となることが期待されている。それだけに、明るくしつかりとした授業態度が求められる。その意味で、自信を持ってできる授業から練習を始めるように指導した。実習経験のある学生には、附属小・中で一度実践した指導案で、そのときのことを思い出させながら練習させた。学生同士で子ども役になり、よい協力関係の中で取り組んでいた。

指導のポイントとしては、

- ①教話、教態の基本
- ②導入の雰囲気づくり
- ③板書計画のたて方
- ④子どもへの語りかけの仕方や子どもの発言の受け止め方

などについて指導した。ここはもう一歩と感じたところについては、少し示範も試みた。

## (5) ロールプレイングや場面指導

養護教諭を目指す学生には、保健室の場面を想定させ、学生同士で教師役、子ども役に代わりあつてなり、批評・反省を繰り返した。また、生徒指導上困難な状況が考えられる都道府県においては、過去問にも生徒指導の困難な場面の対応力が試される内容が多いので、その練習を繰り返した。

指導のポイントとしては、

- ①どのような場面が提示されても、即時対応を迫られるため、各自のベースとなる教育観、教育哲学、児童観をもっていないと迫力が出てこないこと
- ②教師（自分）の都合のためでなく、子どものための実践であること
- ③一人だけで解決しようとせず、学校という組織体の一員として対応していくこと。

したがって、誰と協力して対応すべきかの判断を  
すること

- ④それぞれの場面の対応の仕方に正解はないということ。それぞれの場面に応じて粘り強く子どもに関わっていくということが大切であるということ

#### (6) 教師力育成講座のビデオ視聴

平成 21 年度から開講している教師力育成講座の講師の先生の話ビデオに撮っておき、それを 5・6 人のグループで視聴させた。そうすることにより、現在学校現場が抱えている様々な現代的な課題に対して、学校現場では具体的にどのような問題が起きているのか、それに対してどのような考え方で対応してい

るのか、そして、具体的にどのような対応をしているのかについての生の話を聞かせた。その後、自分が教師としてそのような場面に出会ったらどのように対応するかという自分の考えを話し合わせた。これらの指導を行うことにより、現在学校現場が抱えている教育課題やこれからの教育を進めていく上で大切にしなければならないことなどについての自分なりの考えや対応方法を身につけさせるようにした。

以上のような指導意図をもって、それぞれについて指導してきた。

表 2 平成 22 年度教職相談室利用者数

	学部					大学院			その他	2010年11月30日現在	
	4年	3年	2年	1年	計	2年	1年	計	別科／卒	計 (人)	1日の平均 利用者(人)
4 月	580 ( 164 )	56 ( 32 )	2 ( 2 )	1 ( 1 )	639 ( 199 )	8 ( 4 )	10 ( 7 )	18 ( 11 )	74 ( 28 )	731 ( 238 )	34.9
5 月	554 ( 18 )	10 ( 6 )	0 ( 0 )	0 ( 0 )	564 ( 24 )	21 ( 10 )	19 ( 4 )	40 ( 14 )	106 ( 14 )	710 ( 52 )	39.4
6 月	459 ( 3 )	3 ( 3 )	0 ( 0 )	0 ( 0 )	462 ( 6 )	22 ( 2 )	19 ( 5 )	41 ( 7 )	53 ( 5 )	556 ( 18 )	25.3
7 月	608 ( 5 )	0 ( 0 )	0 ( 0 )	0 ( 0 )	608 ( 5 )	15 ( 2 )	17 ( 2 )	32 ( 4 )	71 ( 5 )	711 ( 14 )	33.9
8 月	422 ( 5 )	0 ( 0 )	0 ( 0 )	0 ( 0 )	422 ( 5 )	4 ( 0 )	17 ( 2 )	21 ( 2 )	58 ( 8 )	501 ( 15 )	26.4
9 月	78 ( 0 )	3 ( 2 )	0 ( 0 )	0 ( 0 )	81 ( 2 )	0 ( 0 )	0 ( 0 )	0 ( 0 )	6 ( 2 )	87 ( 4 )	4.4
10月	223 ( 2 )	11 ( 6 )	0 ( 0 )	0 ( 0 )	234 ( 8 )	4 ( 0 )	8 ( 1 )	12 ( 1 )	15 ( 3 )	261 ( 12 )	13.1
11月	107 ( 1 )	40 ( 16 )	0 ( 0 )	0 ( 0 )	147 ( 17 )	1 ( 0 )	0 ( 0 )	1 ( 0 )	7 ( 0 )	155 ( 17 )	7.4
計 (人)	3031 ( 198 )	123 ( 65 )	2 ( 2 )	1 ( 1 )	3157 ( 266 )	75 ( 18 )	90 ( 21 )	165 ( 39 )	390 ( 65 )	3712 ( 370 )	22.9

\*注1:利用者数はのべ人数である。 \*注2:各月の( )内は新規利用者数(実人数)であり内数である。

表 3 平成 22 年度教職相談室の利用の内訳

2010年11月30日現在										
		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	計
教員採用試験に 関すること	集団討論	159	360	404	398	36	19	74	3	1453
	個人・集団面接	126	10	40	160	126	6	23	34	525
	模擬授業	2	1	5	84	180	3	0	18	293
	作文添削	289	243	53	21	80	28	18	24	756
	情報・資料提供等	122	71	48	44	23	10	37	51	406
小計		698	685	550	707	445	66	152	130	3433
講師採用に関すること		6	6	2	2	1	1	3	0	21
進路に関すること		18	9	2	1	55	19	104	18	226
学校教育に関すること		9	10	2	1	0	1	2	7	32
計（人）		731	710	556	711	501	87	261	155	3712

### Ⅲ 教職相談室利用の実態

#### 1 平成 22 年度教職相談室利用者数

平成 22 年度の教職相談室の利用者数を示したものが表 2 である。

平成 22 年 4 月 1 日から 11 月 30 日までの 244 日間のうち、教職相談室の閉室日は 82 日であった。これを除き開室していた 162 日間における 1 日の平均利用者数は 22.9 人であった。平成 21 年度と比べて 6.6 人増えている。教職相談室の認知度が高まったことや教師力育成講座のビデオ視聴のために来室する学

生が多くなったためだと思われる。また、昨年度までと異なり 4 月当初から多くの学生が訪れていることが本年度の大きな特徴である。一方、例年と同様に、5 月の連休明けから 1 次試験の結果が発表される 8 月末にかけての利用者が非常に多かった。このような利用者の増加に対して、本年度から、2 つの部屋に分けて指導することも可能となった。

## 2 平成 22 年度教職相談室利用の内訳

平成 22 年度の教職相談室の利用の内訳を示したものが表 3 である。これまでの方針を踏襲して、教員採用に関わる全ての指導の最初を作文添削から始めているため、4 月・5 月の指導内容は作文添削が中心であった。その後、多くの教員採用試験で取り入れられている集団討論に関する指導や個人面接・集団面接の指導が増えた。7 月下旬からは 2 次試験に備

えて模擬授業の回数が増えていった。教員採用試験 1 次の結果が発表される 8 月や 2 次試験の結果が発表される 10 月には、進路や講師採用に関する相談も増えた。

10 月以降は 3 年生の利用が増えるため、情報・資料提供や進路に関する相談が中心となった。また教育実習終了後、自ら教師への適性について疑問を持った学生が相談に訪れることも少なくなかった。

表 4 教員採用試験の可否と教職相談室の利用回数等

	教職相談 室の平均	教職相談室利用回数ごとの人数									計(人)
		0回	1～5回	6～10回	11～15回	16～20回	21～25回	26～30回	31～35回	36回以上	
2次合格	16.56	10( 6.8%)	30(20.3%)	21(14.2%)	22(14.9%)	17(11.5%)	12( 8.1%)	13( 8.8%)	8( 5.4%)	15(10.1%)	148
1次合格	9.36	7(12.1%)	21(36.2%)	6(10.3%)	8(13.8%)	8(13.8%)	5( 8.6%)	2( 3.4%)	1( 1.7%)	0( 0%)	58
不合格	4.03	25(28.4%)	44(50.0%)	8( 9.1%)	5( 5.7%)	0( 0%)	5( 5.7%)	1( 0.1%)	0( 0%)	0( 0%)	88
全体	11.39	42(14.3%)	95(32.3%)	35(11.9%)	35(11.9%)	25( 8.5%)	22( 7.5%)	16( 5.4%)	9( 3.1%)	15( 5.1%)	294

## IV 教員採用試験の可否と教職相談室の利用回数

教職相談室を利用した学生とそうでない学生の教員採用試験における可否の結果について比較する。

### 1 分析の対象

#### (1) 分析対象者及び期間

本年度の教育学部及び教育学研究科の卒業予定者 484 名（学部生 338 名、大学院生 95 名、養護教諭特別別科 37 名、特別支援教育専攻 14 名）の内では、休学・留学・9 月卒業・現職教員の学生 38 名と平成 22 年度教員採用試験合格者 1 名と受験したかどうか分からない学生及び結果について報告がなかった 189 名を除いた 256 名。それと、大学院 1 年生で受験した 20 名、他学部で受験した 15 名、既に卒業していて今年度受験した 3 名の合計 294 名を分析の対象とした。

教職相談室の利用回数については、平成 22 年 4 月 1 日から平成 22 年 11 月 30 日までの期間を分析の対象とした。

#### (2) 分類

294 名の内、教員採用試験に最終的に合格した 148 名を「2 次合格」群、1 次試験に合格したが 2 次以降の試験には合格しなかった 58 名を「1 次合格」群、1 次試験に合格しなかった 88 名を「不合格」群と分類した。なお、複数の地域で受験した学生については、最も結果の良かったものをその学生の最終結果として採用した。各群に分類された学生の教職相談室の利用回数を示したものが表 4 である。

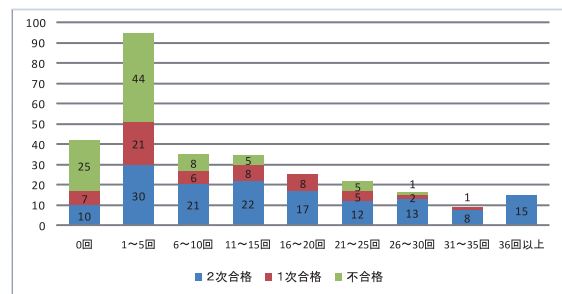


図 3 教員採用試験の可否と利用回数ごとの人数

## 2 教員採用試験の可否と利用回数

一人あたりの教職相談室の平均利用回数は、2 次合格群は 16.56 回、1 次合格群は 9.36 回、不合格群は 4.03 回、全体で 11.39 回であった。昨年度と比較すると、2 次合格群は 5.31 回の上昇、1 次合格群は 2.49 回の上昇、不合格群は 0.24 回の上昇であった。不合格群は少しの上昇であるが、2 次合格群と 1 次合格群は大きく上昇している。特に 2 次合格群は約 1.5 倍上昇している。

本年度の各群の利用回数を比較すると、2 次合格群と 1 次合格群では約 1.8 倍の差があり、1 次合格群と不合格群では約 2.3 倍の差があり、2 次合格群と不合格群では約 4.1 倍の差があった。昨年度と比較すると、2 次合格群と不合格群の利用回数の差が大きくなり、利用する学生と利用しない学生の差が大きくなる傾向があった。

利用回数ごとの人数をみると、不合格群では 1～5 回が最も多く全体の 50.0%であり、0 回と 1～5 回の利用者が全体の 78.4%であった。1 次合格群でも 1



～5回が最も多く全体の36.2%であり、0回と1～5回の利用者が全体の48.3%であった。このことから、2次合格に至らなかった学生は、2次合格群の学生に比べて教職相談室の利用回数が少なかったといえる。また、2次合格群とそれ以外の群では、21回以上の利用者に違いが見られた。2次合格群では、21回以上の利用者が48人(32.4%)であるのに対して、1次合格群では8人(5.1%)、不合格群では6人(5.8%)であった。

## V今後の展望と課題

本年度の教職相談室のべ利用人数が、11月30日までで3712人になった。今までで一番多かった昨年度を1097人上回っている。このように多くの学生が利用してくれるようになったことは大変ありがたいことである。これは、各講座の教員が相談室の利用を勧めてくださったことや学生の口コミで相談室の認知度が上がったことによるものと思われる。これからは更に利用が増えることが考えられる。本年度から2つの部屋を使わせていただいているが、これを更に有効に利用して更なる利用者の増加に対応していきたいと考えている。

本年度は昨年度までと比較して、利用する学生と利用しない学生との利用回数の差が大きくなった。31回以上利用した学生は、2次合格群では23人(15.5%)であるのに対して、1次合格群では1人(1.7%)、不合格群では0人(0%)であった。ちなみに、最も多く利用した学生の利用回数は70回であった。採用試験に合格した後の9月からも、4月から現場に出ることに多少の不安を感じている学生が模擬授業などで利用するようになった。ありがたいことである。その一方で、利用しない学生やあまり利用しない学生に対して、相談室をしっかりと利用するようになる働きかけをすることの必要性が大きくなっている。本年度の教育学部と教育学研究科の卒業予定者484人の内、休学・留学・9月卒業・現職教員・未受験者の111人を除く373人中で、1回でも教職相談室を利用した学生は245人であり、1回も利用していない学生は128人である。教員採用試験を受験しようと思っている学生で、1度も教職相談室に来ていない学生が128人もいるということは残念なことである。このような学生にも教職相談室に行ってみようという気持ちになんとかなってもらえるような働きかけをしていかなければならない。年度当初のオリエンテーショ

ンの場を有効に利用して教職相談室の利用を働きかけたり、3年生が最初に相談室を訪れたときに他の友達も誘って教師力養成講座のDVDを見に来るように働きかけたりして、相談室にこない学生を減らしていきたいと考えている。

教員採用試験合格者の相談室平均利用回数は16.56回であるが、利用回数ごとの合格者数と不合格者数を比較してみると、利用回数が0～8回では不合格者が合格者を上回っているが、9回以上では合格者が不合格者を上回っている。まずは、論作文の指導やDVDの視聴で9回以上の利用を働きかけていきたい。それを4月まで続け、5月の連休明けから集団討論や面接などの指導を行い、試験実施日までに16回以上の利用を実現するように働きかけていきたい。

昨年度と比べて今年度は10月・11月の利用者が大幅に増加している。昨年度が182人で、今年度が416人である。これは、教育実習前後の3年生が教員採用試験に向けての準備のために来室するようになったためである。このような学生に対して、

①毎日リズムを決めて筆記試験に向けて勉強すること

②学校支援ボランティアをすること

③週1回ぐらいのペースで論作文を書くこと

の3点について指導している。特に論作文は、採用試験での有無にかかわらずこの時期から書くことを勧めている。それは、自分なりの教育観や教師観を形成する上で有効であるとともに、集団討論や面接などの対策としても生きて働く力となるからである。利用回数が0～8回ぐらいの学生に対して、教師力養成講座のDVD視聴も織り交ぜながら、「相談室に来て良かった」「また来よう」「今度来るときは仲間を連れてこよう」と思ってもらえるような指導や対応を今後もしていきたいと考えている。

---

Title :

Provision of guidance to students wishing to become teachers (3) :

Status of how the Teaching Profession Consultation Office is being used

Kiyoshi Ogawa and Yasumichi Matsubara

(Center for Teacher Education and Development, Okayama University)

Keywords: Students wishing to become teachers, Teaching Profession Consultation Office, frequency of consultation, effects of guidance

---

